

て検討する為の材料を提出したい。

今一つの問題は、オーラルヒストリーの担い手の位置である。オーラルヒストリーの語り手は往々にして老人であるが、近年の急速な社会の変化によって、語り手は、社会の周辺におかれる傾向にある。こうした問題についても触れてみたい。

資料・研究短報

「近代早期東亜海洋史與臺灣島史國際學術研討會」の報告

奈良 修一(東方研究会)

2000年10月26日から27日までの2日間、中華民国台北市にある中央研究院において「近代早期東亜海洋史與臺灣島史:慶祝曹永和院士八十大壽 國際學術研討會」が開催された。これは、副題にあるとおり、曹永和先生の八十才のお祝いのために開催された学会である。中華民国の研究者だけでなく、オランダ、アメリカ、タイ、日本などから多くの研究者が集まり盛大に開催された。

ご存じの通り、曹永和先生は、日本語も堪能であり、オランダ語史料を用いながら、台湾と日本や東南アジアの関係を研究されてきており、多くの著述をされている。現在では、中央研究院の院士として、今なお活躍されている。

その活動は広く海外にもおよび、オランダ・ライデン大学のL.ブリュッセ博士との親交も深い。今回の学会の開催にあたり、多くのオランダ人研究者が参加したのもその関係である。日本からは、加藤栄一先生をはじめ、永積洋子先生など、6名が参加した。

学会は、英語と中国語で行われた。一日4セッション、二日で8セッションが行われ、一つのセッションにそれぞれ二人の発表者とコメンテーターがつき、全部で16の発表が行われた(但し、生田滋先生が参加できなくなり、ペーパーだけとなっている)。

その発表は、以下の通りである。

第一セッション

Leonard Blusse "God, Gold and Gloom, the Limitations of the Dutch Colonial Project in Taiwan(1635-1645)"

加藤栄一 十七世紀前半期東・南シナ海域における鄭一官と連合オランダ東インド会社

第二セッション

奈良修一 "Zeelandia, the Factory in the VOC Network"

Wouter Milde "Bull in the China Shop, Pieter Nuyts in China and Japan"

第三セッション

Paul A. Van Dyke "The Anglo-Dutch Fleet of Defence(1620-1622): Prelude to the Dutch Occupation of Taiwan"

Dhiravat na Pombejra "The Dutch-Siamese Conflict of 1663-1664: A Reassessment"

第四セッション

生田滋 "Portuguese Voyages in the Indian Ocean and Southeast Asia: A Reassessment of the Role of Macao in the Portuguese Trad in Maritime Asia, 1500-1650"

John E. Wills, Jr. "The Dutch Reoccupation of Chi-lung, 1664-1668"

第五セッション

Patrizia Carioti "Diplomacy, Piracy, Commerce: Some Notes on Kan-ho System (Seals Trade), XV-XVI Centuries"

永積洋子 "The Vermilion Seal Maritime Trade in Taiwan"

第六セッション

莊国土 「論十一至十九世紀初海外華商經貿網路的形成和發展」

陳國棟 「十七世紀初期東亞貿易中的中国綿布—Cangan與台湾」

第七セッション

Jose Eugenio Borao Mateo "Fleets, Relief Ships and Trade - The Communication between Taiwan and the Philippines (16726-1642)"

J. Huber "Relations between Zheng Chenggong and the Netherlands East India Company from 1650 to 1655"

第八セッション

康培徳 「荷蘭時代西拉雅大型聚落で可能成因」

翁佳音 「近代初期的台湾風雲」

二日目の晩餐では、曹永和先生の誕生を祝う宴会となり和やかに進んだ。また、翌日から一泊二日で台南へのオプションツアーが企画された。

この学会で発表された論文は、近々オランダから刊行される予定である。

また、ブリュッセ博士が編集していた"Dagregister te Zeelandia" (『ゼーランディア城日誌』)の第四巻がこの学会でお披露目され、これにより『ゼーランディア城日誌』は全巻刊行されたことになる。今後のシナ海貿易の研究にはきわめて有益な資料が揃ったことになる。これは、当然オランダ語で書かれているわけであるが、台湾の江樹生先生が、中国語訳を刊行しており、現在第一巻が出版されている。(江樹生譯註『熱蘭遮城日誌』第一冊、台南市政府、2000)

日本マレーシア研究会(JAMS)について

左右田直規(国立民族学博物館地域研究企画交流センター)

日本マレーシア研究会は、マレーシアに関する研究と交流のネットワークの拠点として、1992年に設立された。前身は、1987年にマレーシア研究留学中の若手研究者によって立ち上げられた勉強会である。

現在、年に一度、総会を開催するとともに、年に一、二度、研究会例会および関西例会を開催している。そのほか、不定期ではあるが、会員以外に開かれた公開セミナーを主催してきた。年に二、三回発行される会報は、研究会やシンポジウムの情報、マレーシア研究の出版物の紹介や書評、資料紹介、研究ノートなどを掲載している。

1992年の設立当初25名を数えた会員数は、現在では130名以上にのぼっている。会員の大多数を占める研究者(教官、学生など)の専門分野は、人類学、社会学、歴史学、地理学、文学、政治学、経済学、農学、地域研究などと多岐に渡っている。また、少数ではあるが、マレーシアに関わりをもつ企業や団体に所属する会員を含んでいる。

2000年の主な活動をまとめてみたい。まず、研究会例会が、3月24日に、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の「東南アジア島嶼部における人の移動」プロジェクトとの